神様の召しに従って
主の自由に生きる

Ⅰコリント7章17～24節
2021年8月15日
松田 基子 師

キリスト者となって、信仰の価値をどこに置くのか、その事によって、その人の信仰の生き方は変わってきます。 使徒パウロはイエス・キリストに出合う前まで、天地万物を創造し、歴史を導き、全被造物を支配しておられる創造主である神様を信じ、神様に選ばれた民のしるしである割礼を、生まれて8日目に受けた者であり、律法を熱心に守る者であることを誇りとしていました。

しかし、パウロが、律法を熱心に守れば守るほど、律法は彼に、更なる要求を突きつけ、彼は律法に縛られてしまいました。 彼はその苦しみから解放されようと、他者を律法で審きました。その標的になったのがキリスト者達でした。 パウロは、自分は正しい事をしていると思い込んで、キリスト者を迫害し、捕縛するために異国ダマスコまで向かい、その途上で、天に帰られ、神様の右に座しておられるイエス・キリストから、

「**サウル、サウル、なぜ、**
わたしを迫害するのか。」

との声をかけられ、彼は自分の思い込んだ信仰の間違いに気付かされました。

神様は律法を守れない人間を憐れんで、何としても、人類を救いたいとの願いから、御子を人の世に送り、全人類の罪を御子に引き受けさせ、全人類の価値に勝る、神の子の値で、その罪を贖わせて、人類を救う道を開かれました。
それが、ナザレのイエス様の十字架であった事に、パウロは神様からの掲示を受けたのでした。

パウロはローマ書3章23節で、

「**人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。**」

そして、28節に、

「**人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです。**」

更に、30節に、

「**この神は、割礼のある者を信仰のゆえに義とし、割礼のない者をも信仰によって義としてくださるのです。 それでは、わたしたちは信仰に依って、律法を無にするのか。 決してそうではない。 むしろ、律法を確立するのです。**」

と言っています。 パウロは、**神様の御救い**は、今や、神の御子**イエス・キリストを信じる信仰のみによる**と、確信しました。

そこで、
『異邦人にも割礼を受けさせて、
モーセの律法を守る様に命じるべきだ。』
と主張する、律法主義キリスト者の言い分に対して、エルサレム教会へ使徒会議を申し入れ、割礼の必要は無いことを取り付けました。
キリスト教史上、
『キリスト教が世界に広がって行くために、
この決定は必須の事であった』
と言われています。

パウロはユダヤ教から完全に脱皮して、イエス・キリストの十字架の贖いによる唯一の救いを、地中海世界に宣べ伝えて歩きました。
コリント教会もパウロと協力者による1年半の伝道によって生まれました。 しかし、パウロの指導は、1年半という短い期間であり、異教と異教文化の中にいるコリント教会の人々は、キリスト信仰というダイヤモンドの原石は、握ったものの、信仰を磨くというのはこれからで、ダイヤモンドの原石の価値が分からない、イエス・キリストの信仰の、真の価値が分からない人が多く、問題が続出しました。

パウロが第3回伝道旅行で、エフェソに滞在中、パウロの許には、コリント教会の沢山の問題が伝えられ、パウロは問題解決のために、コリント人への手紙Ⅰを書いたのですが、今朝の7章

17節からの問題は、何だったでしょうか。
17節に、
「**おのおの主から分け与えられた分に応じ、それぞれ神に召されたときの身分のままで歩みなさい。 これは、すべての教会でわたしが命じていることです。**」
とパウロは言っています。

コリント教会は大都会の、多民族、多宗教、多文化の中、経済的にも豊かさを誇った、コリント市に生まれた教会です。 ところで、多くの人は、自分と違った環境に生きて、自分より豊かで、自分の願い通りに生きている人を見ると、羨ましくなるものです。
『どうして、自分はユダヤ人に生まれたのだろうか、もっと自由に生きられる、異邦人に生まれたかった』
あるいは、
『自分はどうして奴隷の子供として生まれたのだろうか。 一生苦労の連続で、良いことはない。 ああ、自由人になりたい。』
と思ったでしょう。

私たちも思います、
『私にもっと能力があったら、
もっと伝道が出来るのに』
『私にもっと、経済力があったら、
困った人々を助ける事が出来るのに』
と、この様に、人はなかなか、自分の境遇を受け入れることが出来ないものです。 しかし、それは、裏を返せば、**神様の**最善の**支配**を**信じていない**ことになります。 神様は、一人ひとりを掛けがえのない存在として愛し、命を与え、使命を与えて、世に送り出して下さっています。
『**私に**対して、その**御心は**、
寸分たがわず、押し進め**られている**』
と信じているかどうかです。

神様は決して、依怙贔屓(えこひいき)なさる方ではありません。 神様の目的、計画の下に、この私はそれを遂行する為に、この環境に生まれ、生かされ、そして、神様は何よりも、御救いに召して下さったのです。 他人と比べるのではなく、**自分が置かれた場所**は、神様の**御心**であり、そこで**キリストの香り**を**放つ**ことが、自分に与えられた**使命**なのです。 神様は王宮から囚獄(ひとや)にいる全ての人に、御救いを届けることをお考えなのです。 私たちが**生かされている場**は、神様から**遣わされ**ている**場なのです**。

そこで忠実に務めを果たす事無くして、神様は、その人を、次の御計画にお遣わしになる事は出来ません。 18節から、現状を受け入れられない人々の事が記されています。
「**割礼を受けている者が召されたのなら、割礼の跡を無くそうとしてはいけません。**」
とあります。 どうしてこんな人が現れたのでしょうか。 その人は割礼を受けている人ですから、イスラエル人か、ユダヤ教改宗者です。 割礼は、先祖アブラハムの時代から、神様の民に選ばれたしるしとして、イスラエルの男子は皆、生まれて8日目に、割礼を受けました。 それがイスラエル本国であったならば、割礼の傷跡は誇りであったでしょう。 しかし、離散の民、ディアスポラにとっては、割礼の風習が無く、理解が無いコリント市の中では、恥ずかしさがありました。

コリント市は、ギリシャ、ローマ文化の都市です。 文化の表れの一つとして、公衆浴場がありました。 割礼が分かるので、行く事ができません。 そして、何よりも、パウロが、
「**今や割礼の必要はなくなった。**」
と教えているのです。 そこで、割礼の傷跡を無くそうとして、手術を受けた人も現れました。
一方、
『異邦人であっても、
神の民としてのしるしが欲しい』
と、割礼を望む人もいたようです。

パウロはその双方に対して、
『それは信仰の本質から逸れている』
と教えています。 いまや、イエス・キリストを信じる信仰によって、神様の民、神の子の身分が与えられたのです。 割礼は何の効力もありません。

では、何故、先祖に割礼が求められたのでしょうか。 それは、神様の律法を守り、神様に従いますと言う証でした。 ですから、パウロは、
19節に、
「**割礼の有無は問題では無く、**
大切なのは、神の掟を守る事です。」
と教えています。

信仰の本質から逸れた事柄で悩むのではなくて、
『信仰の本質をしっかり選び取って、
そこを握っていなさい。』
とパウロは教えているのです。 コリント教会には信仰の本質を 見分けなければならない問題として、割礼の問題だけではなく、身分の問題がありました。 1世紀の地中海世界は、ローマ帝国が、その勢力を伸ばし、小国を次々に征服して、属領地を広めて行きました。 敗戦国の要人、技術者、 労働力の有る者、若い女性達は、捕虜にされ、戦利品として、従軍兵士に与えられ、彼らの奴隷となりました。

残った捕虜は、市場で奴隷として売られました。 彼らの生存権は、主人の手に握られていました。 主人の為に何か功績を立てれば、解放されて自由人となる事ができました。 コリントのような大都市の奴隷には、低賃金が払われ、真面目にコツコツお金を貯めて、自分の身を買い戻して、自由人になった人もいました。

5年に1度の、住民調査で、主人の恩赦で、自由人になる人もいました。 そういう人たちは、解放奴隷と言われていました。 都市の構成は、市民権を持つ自由市民、解放奴隷となった自由民、奴隷で、構成されていました。 コリント市の場合は、市民権を持った自由市民が、40％で、残りの 60％は、自由民である解放奴隷とその子孫、そして奴隷、及び各地からの移住者でした。

コリント教会の主な構成メンバーは、自由民と奴隷、そして、ユダヤ教会堂から回心したユダヤ人及び異邦人でした。 実は、この身分関係でも問題が起こっていました。 教会員一人ひとりは、身分に関係無く、イエス・キリストを信じる信仰によって救われ、キリストの体の一部とされたのですから、そこに一人ひとりの存在に優劣は全く無い筈です。 しかし、その事を心から、そう思える人ばかりではありませんでした。 教会の中でも差別があった様です。 パウロはそういう時に、
『教会がそんな事ではどうするのですか。』
とは言ってはいません。

20節で、
「**おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい。 召されたときに奴隷であった人も、そのことを気にしてはいけません。**
自由の身になることができるとしても、
むしろそのままでいなさい。」
と勧めています。 今日の私たちにとっては、受け入れ難い言葉です。 やはり、そこには1世紀の奴隷制度に支えられた社会状況がありました。 パウロは奴隷を始め、全ての人に福音が行き届き、救われる人が、一人でも多く起こることを願っていました。

パウロの考えでは、神様がその人を、その人が接する人々に、お遣わしになるために、召し出されたのだと言う考えです。 ですからその人は接する人々に愛をもって仕え、キリストを証する事が、その人の使命だと考えたのです。 そうして、もう一つ大事なことは、パウロは、
『キリストの再臨は、近い』
と考えていましたから、
『キリスト者は、自分の事で悩んでいる
暇は無い。 一人でも多くの人に福音を
届ける事が、キリスト者の使命だ。』
と考えていたのです。 彼がそう言うことを言い得たのは、キリスト者はキリストに結ばれた事によって、**誰にも奪われる事の無い、身分**を**確保している**との確信があったからです。

22節に、
「**というのは、主によって召された奴隷は、主によって自由の身にされた者だからです。**」
と言っています。 人は、誰も社会的に自由人であろうと、奴隷であろうと、全て罪の奴隷です。イエス・キリストはその罪を贖って下さり、罪から解放して下さったのです。 ですから、その存在は、神の国に於いては自由の身とされています。反対に社会的に自由な身分の人は、キリストを信じ従う事に依って、イエス・キリストの奴隷となりました。

キリスト者は、神の国の身分を与えられた事によって、地上での身分に縛られること無く、生きて行くことが出来るのです。 パウロが一番言いたかったことは、7章23節の、
「**あなたがたは、身代金を払って買い取られたのです。**」
との言葉です。 身代金とは、人質の解放と引き替えに、支払われる金銭のことです。

イエス・キリストは、罪に捕らわれていた人類を罪から解放するために、十字架に架かって、神の子の値を差し出し、買い取って下さったのです。 今や、イエス様に買い戻されて、神の子の身分が与えられているのです。 この自由を、誰にも奪われてはなりません。 パウロはこの様に、既にキリストのものになっているのですから、
「**人の奴隷になってはいけません。**」
と言っています。

神の子の身分を**軽んじては**いけないのです。そこには、**永遠の存在の保証**があるのです。私たちも、キリストによる御救いを受け、**罪の縄目が解かれ、神の子として**の**身分が**与えられ、**キリストにある自由**が与えられている身なのです。

ルターは、キリスト者の自由で
『キリスト者は、全ての者の上に立つ、
自由な主人であって、誰にも従属しない。』
『キリスト者は、全ての者に奉仕する、
僕であって、誰にも従属しない。』
と言っています。 どうしたら、そのような生き方が出来るのでしょうか。 それこそ、24節の、
「**神の前に生きる**」事です。
しがらみの多いこの世を、尚、生きて行かなければならない私達は、すぐに人を見、周りの状況を読み、 世間に縛られ、自由に生きられなくなり、信仰の本質を見失いがちです。 でも、その度に、聖霊は気付かせて下さいます。 神様の前に立って、上からの力を頂いて、信仰の本質を見極め、
『**キリスト者の自由**をもって
判断出来ますように。』
そして、
『**キリストにある自由**をもって周りに
仕えて行く事が**出来るように**』
祈り求めて行こうではありませんか。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様。

イエス・キリストの御救いに入れられ、神の子の身分が与えられ、キリストの自由に生きるように召されている事を感謝致します。この様に大きな恵みを頂きながら、この世の生き方に流されてしまう弱さを抱えています。

どうか、神様の前に立ち、上からの力を与えられて、キリストによる自由に、生きることが出来る者とならせて下さい。

尊い救い主、イエス・キリストのお名前によってお祈りを致します。
アーメン。